

3. 2022年度学会参加報告

2022年日本バイオインフォマティクス学会年会・ 第11回生命医薬情報学連合大会参加報告

細田 正恵

生命医薬情報学連合大会は、2012年より日本バイオインフォマティクス学会と日本オミックス医学会が主催する合同大会である。2022年度は、大阪府豊中市千里ライフサイエンスセンターで「2022年日本バイオインフォマティクス学会年会・第11回生命医薬情報学連合大会」が9月13日から15日の3日間、開催された。「バイオインフォマティクスのフロンティア：環境から健康まで」が今大会のテーマとなっており、情報科学的技術の実践の広がりをアプローチする多様な大会として、基調講演が3つ、記念講演が2つ、シンポジウム・企画セッションが3つ、ワークショップが6つと口頭発表・ポスターセッションが行われた。大会は3年ぶりの対面開催となったため参加者が多く、メイン会場が満席に近い状態になることがあるほど盛況であった。また、人の出入りが多くなるポスター会場に対しては、入場制限が設けられており、コロナ感染対策が行われていた。

基調講演は、大阪大学 蛋白質研究所所長の岡田眞里子先生による Pasmopy という数理モデリングを開発したフレームワークとガン患者固有モデルの構築、予後分類、薬剤応答予測の研究や、神戸大学副学長の近藤昭彦教授によるゲノム解読技術やゲノム合成・編集技術等の先端技術と IT・AI 技術やロボット技術の融合したバイオファウンドリーの研究、理化学研究所革新知能統合研究センター 副センター長の上田修功先生による「AI の新潮流」として従来のモデルベースアプローチとデータ駆動型アプローチの融合の研究について行われた。



学会の会場となった千里ライフサイエンスセンターを撮影

本大会では、「医療から環境まで広がる糖鎖の世界へ」という演題で90分間のワークショップを主催した。糖鎖についてのワークショップは、日本バイオインフォマティクス学会にて初めての採択となった。糖鎖について広く知ってもらうため、ウェットの糖鎖研究者にも講演いただくなど工夫し、大阪国際がんセンター研究所の原田陽一郎先生、新潟大学大学院の瀧原速仁先生、創価大学から木下聖子副所長と大学院生の荒川康一さんの4件の講演と質疑応答を行った。木下副所長より本研究所のアピールもしていただき、本ワークショップは、遺伝子やタンパク質専門のインフォマティクス研究者へ糖鎖生物学および糖鎖インフォマティクスを認知していただく機会となったと思う。また、ワークショップ等での座長経験は初めてとなり、とても緊張したが良い経験をさせていただいたことに感謝している。